



地域に開かれた学校づくりにおける現状と課題

藤崎町立藤崎中央小学校長 宇野 元 雄

はじめに

学区は藤崎町のほぼ中央に位置し、中心街より北東に約 1.5 kmの地点にある。りんご園、水田に囲まれているものの、農業従事者は 7.9%と少なく、近郊の市街地に勤める会社員が半分を占めている。旧西中野目小、旧小畑小との統合と藤崎小学校学区の一部地区を合わせ平成 6 年に開校した比較的新しい学校である。

校舎は、いわゆるあちこちにオープンスペースを設けた斬新なもので、余裕のある空間を設けてあり、教室もこれまでの廊下側の仕切り壁が取り払われたワークスペースを組み込んだ型の教室形態となっている。この造りを最大限に生かし、チームティーチングを取り入れた個別化個性化と総合的な学習の推進は、本校の特色である。

学校経営及び教育の基本方針の理解

「すべては子どものために」経営判断の基準はこの一点につきる。教職員個々の力を最大限に発揮し、教育の質を高め、子どもに力をつけることで、地域に愛され信頼される学校をめざす。「子どもの姿で地域に返そう。」が合い言葉である。また、ホームページ、学校だより、学年便りなど学校からの情報発信に努め、現状を保護者や地域の人々に知らせ、家庭や地域社会とともに子どもを育成するといった啓発活動、連携に力を入れている。

地域に開かれた学校づくりの現状

地域の教育力の学校教育への導入・活用

「総合的な学習の時間」をはじめとする授業に地域の人材や教材を活用することは、学校の教育内容を多様なものとするとともに、外部の新しい発想や教育力を吹き込むことになり、教職員の意識改革、学校運営の改善にもつながっている。また、スクールバスをフルに活用し、地域へ出かけ、体験活動の充実を図ることができている。

ア．課題設定型総合的な学習

【1年以上～チャレンジ学習テーマ】

1 学年【植物】 2 学年【生物】 3 学年【藤崎町】
4 学年【水】 5 学年【衣・食・住】 6 学年【生きる】*子どもたちへの教育支援及び関係機関 ~ P T A、教育委員会、町郷土史家、医師、消防士、税理士他、公共施設等



イ．学年設定体験学習

【3年以上～トライ学習（体験学習 中心）】

3 学年 テーマ「環境りんご」

・藤崎町の主要産業であるりんごに関する体験を多く取り入れ、人工受粉・袋かけ・シール貼り・収穫・りんご料理・クラフトを体験する。*子どもたちへの教育支援及び関係機関~ P T A、りんご農家、



ＪＡつがる弘前、料理研究家

４学年 テーマ「福祉・自分たちにできること」

- ・福祉施設、養護老人ホームを訪問し、施設園生と交流を通して福祉について考える。
- ・障害者との交流を通して障害についての理解を深める。

＊子どもたちへの教育支援及び関係機関～

町福祉協議会、各施設長、特別講師、町福祉施設

５学年 テーマ「環境 米」

- ・米づくりを通して食・環境について考え、田植え、稲刈り、脱穀、餅つき、もち米料理を体験する。

＊子どもたちへの教育支援及び関係機関～

ＰＴＡ、ＪＡつがる営農指導員、農家

６学年 テーマ「国際理解・世界と自分」

- ・凧づくりを通して国際凧の会のメンバーと交流(国際凧フェスタ)、ＡＬＴとの英語活動

＊子どもたちへの教育支援及び関係機関～

国際交流推進委員、ＡＬＴ



ウ．クラブ活動（４年以上）

外部指導者（１５名）～グランドゴルフ、凧、料理、囲碁、茶道、英会話、郷土芸能
エ．読み聞かせ～よむよむ応援隊（町サークル）毎週木曜朝全学年へ（６名）

オ．保健指導及び体育実技指導～町保健婦・町栄養士・ＰＴＡ他

学校の教育機能の地域への開放

学校施設開放はスポーツ少年団活動及びＰＴＡ活動が主となっている。

体育施設～【体育館（長期休業・夜間）】ミニバスケットボール、

文化施設～【会議室・中央ホール・視聴覚室】ＰＴＡ研修、学年研修、お話し会

学校評価

ア．１２月、学校評議員および保護者に学校経営・教育活動に関するアンケートを実施し、点検を行い開かれた学校づくり、信頼される学校づくりに生かしている。

イ．学校評価公表 ２月参観日、学校便り及びホームページ

課題

地域の教育力を最大限に学校教育に取り込んでいることで、今後も教育計画、内容において充実を図り、成果をより詳細に発信していかなければならない。

「生きる力」の育成には、保護者の理解、家庭教育の充実が望まれる。モラルの高揚、地域教育機能の復活には、地域に住む人々のための学習・教育の機関としての学校機能を十分果たしていくことが必要である。ＰＴＡ、地域住民のための学習機会の提供、コミュニティーの拠点として、今後、啓発活動とともに、活用・整備・推進を図っていきたいと考える。

「思いを伝え合う子どもの育成」をめざして

平川市立猿賀小学校

研修主任 嶋川 央子

1 研究の概要

本校では、今年度から「思いを伝え合う子どもの育成」の研究主題の下、3年次計画で国語科の指導を中心とした研究に取り組んでいる。

学校教育目標

たくましく生きる子どもの育成

- ・思いやりのある子
- ・すすんで学ぶ子
- ・体をきたえる子

過去3年間の算数科の指導に関わる研究の成果

- ・算数科学習の基礎的学力の向上
- ・課題に取り組む意欲の高まり

研究主題

思いを伝え合う子どもの育成
国語科の指導を通して

温かい人間関係の中で聞き合い、話し合い、互いのよさや違いに気付くことによって、磨き合い、考えを深め、より个性的で創造的な考え方や表現ができるようになってほしい。

授業場面

- ・話し合いが活発でない。
- ・考えの練り合いや磨き合いがなく、深まらない。

日常生活

- ・言葉で適切に表現する力が乏しい。
- ・自分の思いや考えを、うまく相手に伝えられずにトラブルを生じやすい。

一般的傾向

- ・自律心や主体性の面で不十分なところがある。
- ・人のかかわりの中で、よりよく問題を解決したり、切磋琢磨し合いながら、課題を追究したりといった取り組みがあまり見られない。

めざす子ども像

- ・自分の考えや思いなどを積極的に言葉で表現しようとする子ども
- ・友達の考えを聞き、互いのよさや違いを認め、自分の考えを深めようとする子ども

研究目標

自分の思いを積極的に言葉で表現し伝え合う子どもを育成するために、国語科の指導がどうあればよいか授業実践を通して探究する。

研究仮説

以下の視点に基づき、国語科の指導を工夫改善し授業の充実を図ることにより、考えや思いを伝えたいという意欲が高まり、言葉で理解し表現する力が育つとともに、互いに考えを認め合い深め合うことができるようになるのではないかと。

視点1 指導方法、指導体制の工夫改善
個に応じたきめ細かな指導の工夫
指導体制、学習形態の工夫
年間指導計画の工夫改善

視点3 評価の工夫改善
多面的な評価の工夫
評価規準の見直し

視点2 教材教具の工夫改善
「話し方・聞き方の約束」の作成
話し合いのマニュアルの作成
ワークシートの作成
教具の開発

視点4 学習環境の整備
言語環境の整備
学習を支える活動の工夫
家庭、地域との連携

研究内容

各領域における指導の工夫

- A 話す・聞く（ア・イ・ウ）
- B 書く（ア・イ・ウ・エ・オ）
- C 読む（ア・イ・ウ・エ・オ・カ）

学年間の系統的な指導の工夫

- ・本校でめざす「思いを伝え合う子どもを育成するための指導、内容や言語活動について、各学年のつながりや系統性を明らかにする。

研究計画 < 第1期(3年間) >

・研究内容 については「A 話す・聞く」の領域を中心に研究を進める。

	第1次	第2次	第3次
低	「知らせたいことを選び楽しく話す」力を培う指導方法・学習環境の工夫	「順序を考えながら話す，内容や順序に気を付けて聞く」力を培う指導方法・教材教具の工夫	「大事なことを落とさずに思いを感じ取って聞く，話題に沿って話し合う」力を培う指導方法・評価の工夫
中	「思いを持って話す」力を育てる指導方法・学習環境の工夫	「相手を意識してわかりやすく話す，話の中心に気を付けて聞く」力を育てる指導方法・教材教具の工夫	「相手の考えを聞き，自分の考えを深めながら話し合う」力を育てる指導方法・評価の工夫
高	「考えや意図がわかるように話す」力を育てる指導方法・学習環境の工夫	「話の組立てを考えて話す，話し手の意図をつかんで聞く」力を育てる指導方法・教材教具の工夫	「言葉遣いに注意しながら，立場や意図をはっきりさせて話し合う」力を育てる指導方法・評価の工夫

2 各学年部会の取り組み

低学年部会 「知らせたいことを選び楽しく話す」力を培う指導方法・学習環境の工夫

- (1) 指導方法の工夫 話す意欲を持ち正しい発音や抑揚，声の大きさなどを身につけることができる学習過程の工夫
口の体操，音読，言葉遊びなどを授業の中に位置づける。
話し言葉と書き言葉の関連を図るために，視写，聴写の時間を設ける。
教師と一対一で話し方を学ぶ時間を設ける。

読む，書く，話す，聞くを相互に関連させながら，話し言葉を磨く時間を学習過程の中に位置づけ，意図的な指導を行う。

- (2) 学習環境の工夫 話す意欲を喚起する教室掲示の工夫
掲示物を整える。(五十音表，声のものさし，話し方基本表，口形図など)
学習の足跡や話題のもととなるもの(日記，詩，インタビューカード，発見カード，発表メモ，ワークシート)などを掲示するコーナーを設ける。

話が一方通行とならずに言葉のやりとりへとつながることをねらい，楽しい話題が生まれるような教室環境を考える。



中学年部会 「思いを持って話す」力を育てる指導方法・学習環境の工夫

- (1) 指導方法の工夫
自分の考えや思いを持ち進んで話し合おうとする態度を育てる学習過程の工夫
(発声練習，「話す・聞く」ゲーム，音読，調べる・書く・発表しあう・振り返りなどの活動の仕方，ワークシートやカード，メモの活用)
発表の技能を磨く学習活動の設定
場面設定と学習形態

- (2) 学習環境の工夫
掲示物
時間の設定
板書

・叙述に即して正確に読みとる活動，
想像的に読む活動をもとに，書く活動，
話す・聞く活動を充実させる。
・積極的に表現する意欲を持つことができるように，
発表の技能の習熟を図る。



高学年部会

考えや意図がわかるように話す力を育てる指導方法・学習環境の工夫

(1) 指導方法の工夫

「表現方法を多様化させるために」

話す場や目的を明確にし、適切で効果的な話の組み立てや言葉遣いを指導する場面を設定する。

話し方マニュアル(声の強弱, 言葉の使い方・選び方)

学習形態の工夫(少人数, 学級全体, 全校, 学校外など多様な場面に対応)

(2) 学習環境づくり

「自信を持って話すことができるようにするために」

伝えたいことを適切に話すことができるように、語彙を増やす。スピーチ, 暗唱等の話す(声を出す)活動を日常化する。

言葉集めノートづくり

読書活動

声を出す活動の日常化



3 今年度の成果と課題

(1) 成果

発音練習(口の体操, ことばあそびなど), 声のものさしや話し方基本表・口形図などの掲示と活用により, 声の強弱や適切な言葉遣いを意識するようになってきた。

話し言葉を磨く時間を学習過程の中に位置づけて, 意図的な指導を継続することにより, 話すことへの抵抗感が軽減されてきている。

教材文の読解の深まりが, 音読の工夫(声の強弱, 速さ, 間などの工夫)へとつながってきている。

「書く」「話す・聞く」の学習では, 個別指導やグループ別指導のためのT・Tが, よりきめ細かな支援ができる点で効果的であった。

討論会やパネルディスカッションなどの場を設定することにより, 相手を意識して話そうとする姿勢が見られるようになった。また, わかりやすく伝えるための資料を準備したり, 話の組み立てを考えて話したりするようになった。

スピーチメモや発表原稿の作成, ワークシートの使用や事前の練習が, 話す前に思いや考えを持つ上で有効であった。

「ことば集めノート」を持たせたことにより, 言葉への関心が高まるとともに, 自分なりのノートを作って活用しようとする子どもが増えた。

異学年に向けて発表するなどの工夫により, 発表意欲を高めることができた。

(2) 課題

話し方マニュアルにより, 話の内容や場, 相手に応じた話し方があること, またその必要性を認識させることはできたが, 話し言葉としての定着までは大変むずかしい。授業の中(国語科に限らずできるだけ多くの場面)で活用させながら徐々に慣れさせていくとともに, 実態にあったその子なりの話し方を認め, マニュアルの柔軟な活用を進めることが重要である。

多様な表現方法を会得させるために, 事実表現にとどまらず感動表現をすることができるような指導の工夫が必要である。

「話すこと・聞くこと」の指導においては, 評価しやすい(成長が見えやすい)表面に現れる部分を整え, 育てていく指導だけでなく, 豊かな内面を育てる指導を一層大切にする必要がある。

基礎・基本の定着を高めるための指導はどうあればよいか

～繰り返し学習を意識した指導過程の工夫を通して～

黒石市立中郷中学校 校長 小山内 孝
(研修主任 高松 智子)

1. はじめに

本校では、向上心があり、知的好奇心を持って意欲的に学びに向かっている生徒がいる一方で、学習用具がそろわず、課題にチャレンジする活力やわかるまでやり遂げる学習継続力に欠け、学習が成立しない生徒もいるという実態を抱えている。従って、基本的な学習態度や学習習慣をどう確立させるか、中間層・下位層をどう動かすかが本校の課題である。特に「中間層の行方」は、好ましい学習集団を作る上で大きなカギとなるところである。その方策の一つとして昨年度から始めた全校一斉基礎学力テストは大きな意味を持つものである。授業での小テスト、基礎学力テスト、定期テストを連動させたことで、「できた!」という達成感や喜びを味わった生徒が増えたということが学校の学習意欲が高まり始めた要因である。今後は、魅力ある授業づくりの中で、「わかった!できた!」という感動を生徒にたくさん体験させることで学びに向かう生徒を育て、基礎・基本を定着させることが急務である。

このような生徒の実態を踏まえ、昨年度より「基礎・基本の定着」をめざした校内研修を進め、今年度はその2年目にあたる。1年目は「授業の見通しを持たせる評価の工夫を通して」をサブテーマに、「単元開始時に単元全体を見通した評価表でオリエンテーションを行い、終了時には自己評価させることによって、単元の目的、キーワードなどを押さえて学習に取り組むことができ、基礎・基本の定着が高まっていく」という仮説のもとに研究を進めた。その結果、評価表提示時期などに課題は残ったが、「基礎・基本の精選ができた」「生徒・教師ともにフィードバックする材料になった」「生徒が自分の能力・技能を見つめ、次の学習へのステップアップにつながった」などの成果を得た。さらに今年度は、評価表で基礎・基本を精選し、繰り返し学習を意識した指導過程を工夫することによって基礎・基本の定着をめざした研究を進めている。

2. 研究目標

基礎・基本の定着を高めるために、「評価表」で基礎・基本を明確にし、授業において「繰り返し学習」を意識した指導過程を工夫することが有効であることを実践を通して明らかにする。

3. 研究仮説

「評価表」で基礎・基本を明確にし、「繰り返し学習」を意識した指導過程を工夫することによって、基礎・基本の定着が高まっていくであろう。

4. 研究内容

(1) 「繰り返し学習」を意識した授業づくり

日常的に何をどれだけ繰り返すか ~『理解は一発で、定着は繰り返しの中で!』~

・達成目標を設定し、「毎時間復習」「週単位で復習」「単元の最後の2時間で復習」など、教科担任の指導計画に合わせて繰り返し学習を取り入れる。

- ・繰り返し学習の成果をテストで確認し、目標を達成させることで、小さな達成感を積み重ね、「やればできる」という自信をつける。
- ・生徒が「できた!」と実感できる場面を設定する。

(2) 「評価表」の作成と活用

単元ごとの「評価表」を作成し、基礎・基本を明確にする。
生徒に単元の到達目標を明示し、学びの見通しを持たせる。
単元終了後の自己評価により、学習を振り返る。

- ・生徒の学ぶ意欲を喚起し、学びを支援する評価活動
- ・教師の授業改善に役立つ評価活動

単元テストなどで定着度をはかり、必要に応じて支援も講じる。

(3) 全校一斉基礎学力テストで中間層・下位層を動かす = 「学習への適応」対策

国・数・英について年4回(3年3回)、3教科50分で実施する。
テスト内容は授業で扱った「繰り返し学習の基礎・基本」とし、定期テストにも出題する。授業・家庭学習・定期テストを連動させることによって「できた!」という達成感や自信をつけ、「努力は報われる」という効力感を育てる。
優秀賞(100点),優良賞(90点~),努力賞(前回より10点以上アップ)を与える。
受賞者名を廊下に貼り出す。

個人カードを活用し、テストに挑戦する意欲を促し、成果を実感させる。

教科担任がテストを作成し、教科係がテストの採点・集計をする。

(4) 公開授業・見せ合い授業の実施 = 教師の指導力アップ

できるだけ多くの教師が略案での公開授業を行い、授業力・指導力の向上とともに生徒の基礎・基本の定着を図っていく。また、略案なしで、学年、教科を超えて気軽に授業を見せ合うことでお互いの技をシェアし合い、授業力を養う。「授業参観カード」で多くの感想やアドバイスを収集し、事後の研究に役立てる。

(5) 好ましい学習習慣の確立 = 「基礎学だより」でアピール

「学習の約束」アンケート

家庭学習調査(定期テスト前5日間)

5. 今年度の成果

【1】要請訪問：10月30日

指導者	教科	クラス	題材名
長尾 馨一	国語	2年4組	古典に親しむ「漢詩の風景」

(1) 本時の目標

三編の漢詩を四コマ漫画を使って発表することができる。

さまざまな音読活動を繰り返し行うことによって漢詩を読むことができる。

(2) 生徒の実態

男子に活発な面が見られ、女子は比較的黙々と課題に取り組むタイプの生徒が多い。今年度の国語の学力検査偏差値平均は52.8と高く、特に言語事項の領域が昨年度より高い伸び率(全国比124%)を示している。古典に関するアンケートでは、「好き」が37.1%、「嫌い」が62.9%と苦手意識を持っているので、

いかに好きな方向へ持って行くかも授業の課題としたい。

(3) 校内研との関わり

中学校で扱う古典教材は「古典に慣れ親しむ」ということが大前提である。そのためには古典の授業が楽しくわかりやすいものでなければならない。その方法として音読は欠かせない要素となってくる。

今年度の校内研修のテーマは「繰り返し学習を取り入れた授業の展開」である。さまざまな音読活動を繰り返し授業の中に取り入れ、そのことを通して古典教材に慣れ親しませたいと考える。また、慣れ親しむことによって自然と古典の世界に引き込み、その奥深さに気づかせたい。今回は、漢詩という一見取っつきにくい教材であるが、四コマ漫画にすることによって漢詩の作品世界を理解させるとともに、二学年国語の課題である生徒の発表力をも高めたいと考える。

(4) 展開

三編の漢詩の読み(追い読み 精読 ペア読み リレー読み 群読)

四コマ漫画を使った発表(漢詩の朗読 四コマ漫画の説明 質問・感想発表)

三編の漢詩の群読(クラス全員)

(5) 先生方の感想(高校の先生方を含む)

声の大きさ、暗記をしての発表など、意欲的な部分がたくさん見られた授業であった。漢詩を抵抗なく、楽しそうに授業していたのに感心した。最後の読みも自信に溢れていて、普段の繰り返し学習が生かされていると感じた。抵抗感を持ちやすい古典を絵を描かせることで親しみを持たせるなどの工夫が見られた。グループを活用して全員に発表の場が与えられたところが、授業への集中や緊張感につながっていて良かった。

生徒達が古典が好きで、「一生懸命やろう」という気持ちが伝わってくる授業だった。堂々とした音読も、素直で鋭い意見発表も、ここまでのものにするには多くの時間が必要だったと思う。きめ細かい指導に頭が下がります。アンケート結果を見ても、古典のおもしろさ、楽しさをちゃんと感じている生徒が多いことに驚いた。中学時代にこれほど古典に興味を持ってくれる子どもたちを古典嫌いにさせてしまうのは高校なのでしょう。中学校の授業を見せていただく機会がほとんどないため、貴重な1時間だった。外でも廊下でも、生徒の挨拶が気持ちよかった。(高校)

中学生が漢詩をスラスラと暗唱していてびっくりした。四コマ漫画を通して、漢詩の場面を表現させているところがわかりやすくおもしろかった。前時に四コマ漫画を描きながら、生徒同士でワイワイと解釈しながら作業した様子が想像でき、ほほえましく思った。本校でも現在、源氏物語や徒然草を勉強し、生徒は古典のおもしろさを味わっている。小学校から古典に親しみ、中学校でこのような形で漢詩を自分たちなりにイメージ化し、学習していることは、高校に入ってから 古典ギライ の生徒をなくすのに効果的だと思った。中学生の皆さんが元気よく挨拶し、ユーモアのセンスをもって楽しそうに勉強しているのを拝見して、とても「いいなあ」と感じた。(高校)

最後に楽しそうに詩を群読している生徒の顔に、本授業(単元)の大きな目標である「古典に慣れ親しむ」に到達できたと思う。生徒達が楽しく、しかも深く詩を解釈していることに驚かされた。中学校では生徒の主体的な活動を大事にしていることが印象的である。今後もこのような授業に多くの教員が参加できればと思う。(高校)

【2】中郷中学校区教育を考える会（小中連携）：11月13日

	指 導 者	教 科	クラス	題 材 名
1	藤本 恵美	国 語	3年4組	夏草 「おくのほそ道」から
2	後藤 貴光	社 会	3年1組	「消費と貯蓄」
3	蒔苗 直樹	数 学	3年5組	「三角形と比」
4	須藤 秀一 奈良岡 淳(北陽小)	理 科	2年1組	「物質が結びつく変化を 調べよう」
5	千葉 暁生 須藤 隆浩(中郷小)	英 語	1年1組	「何時ですか？」
6	安達あや子	音 楽	1年5組	アルトリコーダー「ラヴァースコンチェルト」
7	小田桐智子 木村美穂子(黒石小)	体 育	2年2組	器械運動 「マット・跳び箱」

(1) 小学校の先生方の感想（高校の先生方を含む）

落ち着いた雰囲気、年表あり、劇あり、家系図あり、工夫された発表だった。教材解釈など教師の話聞く時間が長かった自分の中学校時代に比べると、意欲的に学習に取り組む要素がいっぱいで良かった。子ども達が落ち着いた精神状態で授業を受けるためには、生活面、心の安定など、授業を受ける以前の生徒指導的な問題も数多くあると思う。小学校では小学校でできることをやって、中学校に送り出したい。【国語】

学級が落ち着いていて、学習に意識がしっかり向いていた。となり同士などのコミュニケーションも取れていて、意見の確認もしながら考えを深め合っていた。【社会】

確認問題で生徒同士がわからないところを聞き合っていてとても良かった。例題、確認、ワークと3つの段階で内容を確認し、とても丁寧だと思った。黒石小の教え子何人かと授業前に話をしたが、成長しているなど感じた。【数学】

基礎・基本がしっかり押さえられていて、繰り返し学習の成果が出ていると思った。

中学校の先生は専門的な知識や技術が優れ、実験技術はとても参考になった。小学校の教師が授業に入り、提案性の高い授業を見ることができた。【理科】

授業が明るく楽しいという印象を受けた。子ども達が恥ずかしがることなく、積極的に参加しているのが意外にも感じたほどで、普段の積み重ねが生きていたのだと思う。学習内容が多いにもかかわらず、一人一人と対話する時間も作っていて「個を大事にしている」ということも感じた。このような指導が子ども達を意欲的に授業に取り組ませているのでしょうか。子どもの成長にびっくりです。【英語】

1時間の中に、基礎・基本の技術の繰り返し、自己評価カードへの記入、リコーダーの手入れがきちんと取り入れられ、指導案通りに実施されていた。音楽という教科を通して、姿勢や授業に臨む態度を身につけさせたいという先生の願いがよく伝わってくる授業だった。技術面では個人差が大きいと思うが、教科の特質を超えて共通して身につけさせることを教師がしっかり持つということこそ是非見習っていきたい。専科の先生の授業技術はぜひ小学校でも交流会などで見せていただきたい。(美術・体育も)【音楽】

体育館に入ってびっくりしたのは、高い跳び箱、跳び箱の長さ。小学校の段階で何を徹底させないといけないかを、その用具や今日の授業を見て実感できた。今まで国語・数学など主要教科しか見れなかったが、私は教師になって初めて中学校の体育を見ること

ができてとても勉強になった。小学校で身につけなければいけない感覚を繰り返し、繰り返し行って体育面での基礎もしっかり身につけたいと感じた。子どもが能力差に関係なく、とても意欲的だったのが印象的だった。【体育】

どの生徒も生き生きと活発に授業に取り組んでいて、とてもすばらしい授業だと思った。1年英語で、数の導入から時計の読み方への展開はとても参考になった。ほとんどの生徒は speaking と listening については本時の目標はマスターしたと思う。writing と reading が授業の中心となる高校とは大きな違いを感じた。大学から高校側への要望の一つに、英文の構造と英文の内容を理解して欲しいということがあった。次回は writing と reading、また3年生の授業も拝見できれば中高の連携になっていくと思う。辞書や副教材の使い方も知りたい。(高校)

6. おわりに

今年度は、計画訪問、要請訪問、小中連携授業など指導案を作成しての研究授業は実に27教科に及んだ。この他に見せ合い授業や指導案なしの公開授業を含めたら優に70を超えるであろう。超多忙を極めても一つ一つの取り組みを地道に成功に導いてくれた本校先生方には感謝している。「学校は魅力ある授業と確かな学力を保證できたか」という疑問には、即「もちろん！」と胸を張って断言はできないが、しかし、この2年間の研究の積み重ねを通して「生徒が学習に向かっている」という手応えは感じている。確かに何か動き始めている。この小さな変容が中郷中学校のさらなる可能性を引き出すものとなるよう、来年度はさらに一歩進めた研修が展開できればと思う。



校
区
を
考
え
る
会



要
請
訪
問





大韓民国ソウル黒石初等学校との国際交流

アンニョンハセヨ

～ 言葉を越えて 国境を越えて～

黒石市立黒石小学校

教諭 小山内 睦子

ねらい

- ・ソウル黒石初等学校の児童、保護者、教職員との交流を通して、見聞を広め韓国の友だちと仲良くし、広い視野でものを考えたり、故郷黒石市のよさを見直したりすることができる。

1 交流の概要

- (1) 平成12年にソウル黒石初等学校との姉妹校調印し交流スタート(同名校)
- (2) 相互訪問(黒石小学校へ ソウル黒石初等学校へ)
 - ・ソウル黒石初等学校在籍児童の家庭へ訪問したい子の募集(3泊4日)
 - ・事前に言語・生活マナー学習
 - ・作品交流(児童の絵図・版画・習字を送り合う)
 - ・全校児童への報告会(ソウルについて知ってもらうため)
- (3) ホームステイの協力
 - ・受け入れ家庭の募集(1家庭2～3名で日本や黒石の文化に触れさせるため)
- (4) 手作りのもてなし(全児童との交流のための準備)
 - ・受け入れ準備(ハングル語の歌、言語学習、ソウル文化についての講義開催)
 - ・学級で参加授業(ゲーム、昔の遊び、ドッジ、ハングル語、自己紹介等)
 - ・全校交流会(玉入れ、ボール転がし、黒石よされ・甚句など体験、ハングル語歌)
 - ・文化交流(ねぶた演奏・運行、三味線・琴演奏等、民族舞踊、テコンドー演技等)

2 人と人をつなぐ交流

- (1) ソウル黒石初等学校の児童、教職員、PTA(交流委員会)
 - ・儒教の教え 厚くもてなすソウルの方々 言葉は通じなくても心からの交流
- (2) 黒石小学校職員
 - ・一丸となつての準備・運営 黒小OBも進んで参加
- (3) 黒石小学校PTA(交流委員会)
 - ・何と云ってもホームステイの受け入れ お金はかかるが得るもの大きい

3 言葉を越えて 国境を越えて

国際交流は人と人のつながりである。言葉は通じなくても心はつながる。国境を越えてもつながるのは人と人の心であることを、黒小の子どもたちはこの8年間の交流を通して感じている。そして、私たち教職員やPTA、地域の方々も含めみんなで協力し合い、心を1つにして作り上げてきた交流である。こういうつながりも大事である。この交流が続いてきた理由は、今まで交流して積み重ねてきた、多くの方々とのつながりがあるからである。この交流を経験した黒小の子どもたちが、将来『世界の人々と共に生きよう』とする大人になっていくことを願っている。

社会体験学習（シゲ学習）

弘前市立第三中学校 研修主任 前田 達哉

平成14年度から始まった「総合的な学習の時間」では、全学年で社会体験学習に取り組み、多くの事業所・施設にご協力いただくことができた。前年度の活動をもとに、改善、工夫を加え、より発展させることができ、大きな成果をあげることができた。

(1)位置づけ

「総合的な学習の時間」の名称を「シゲ学習」とし、その内容の一分野として事業所・施設訪問を取り入れている。

(2)ねらい

異年齢の人々のふれあいを通して、豊かな人間性や社会性を身につける。

対人関係の力...大人とのふれあい、班活動を通して生徒同士のふれあい、仲間づくり
コミュニケーション能力...電話交渉、インタビュー、挨拶

自立心...活動に主体的に関わる実行力、アクシデントに対し、臨機応変に対応

(3)段階をふんだ社会体験学習

関連したテーマのもと3年間の継続した活動である。

	活 動	全体テーマ	活動テーマ	発展テーマ	観 点
1 学年	職業調べ学習	ふ れ あ い	調べる	出会う	地域に関心を持ち働きかける
2 学年	職場体験学習		働く	見つめる	様々な生き方にふれる
3 学年	老人福祉施設訪問		生かす	高める	これからの生き方を考える

(4)方針等について

少人数で多くの事業所に

少人数なら受け入れてもらえるし、一人ひとりが体験から学べることも大きい。本校のように700人を超える大規模校では、多くの受け入れ先が必要になる。6年前に全校職員で取り組んだ事業所・施設への協力依頼の熱意を忘れず、毎年新しい気持ちでお願いしている。また、保護者や同窓会等からの協力の申し出には、最優先している。

協力事業所・施設への依頼の姿勢

事業所・施設の方々が「協力してよかった」と思えるようにしている。そのためにも、直に足を運び、生徒の感想や活動の記録集を提供している。生徒の言葉が一番のお礼になるように記録集の作成等に、そのことを組み入れている。

記録

活動の様子を写した写真やビデオを活用し、文化祭での報告会を通して、他の班や学年、保護者へ伝えるようにしている。そのことを相互評価にもつなげている。



他管だより

豊かに生きる子どもを

野辺地町立馬門小学校

教頭 須々田 康子

「雄々しき姿烏帽子岳、下北の山^{うすが}淡霞すむ、冬は吹雪の陸奥の海」

校歌の一節に歌われるように、本校は、南北に山と海があり、東西は津軽と南部の藩境に位置する、児童数70名の小規模校である。「人づくり」を町政運営の基本施策の一つに掲げ、「烏帽子岳のように誇り高い文化と教育の町」づくりを教育の施策目標に掲げる野辺地町の、3つの小学校の中で最も少人数の学校で、学区も馬門自治会単独からなる。したがって、学校・家庭・地域の連携や協力がなくては、行事も成り立たないことが多い。

野辺地町は、物資の交易のために古くから湊が開かれ、商業が発達し、上方から食を含めいろいろな文化が伝わった町である。祇園祭もその一つで、馬門自治会では、毎年、この祭りに参加することはもちろん、他にも馬門コミュニティー文化祭、馬門健康づくり運動会などの行事があり、どの行事にもPTAや児童が参加する。協力して当たり前の雰囲気ができていることは、学校の財産である。

もちろん、学校行事にも協力的である。運動会には、学校職員が出勤する前からPTAが集合し、率先してライン引きやテント張り、用具運びなどを行う。万国旗だけでなく、大漁旗もグラウンドの青空に舞う。初めてこの光景を屋上から見たときには感動したものだ。少人数なので、運動会は児童の種目だけでなく、ユニークなPTA種目や自治会種目も盛りだくさんだ。周りが、参加している親を子どもの頃の呼び名で応援しているところが微笑ましい。誰がどこの子で誰の親なのかを地域の人みんなが知っている。

また、本校では、地域の方をゲストティーチャーとして活用し、我が国の伝統文化である柔道・茶道の学習を総合的な学習の時間に行っている。1年生から6年生まで男女とも、柔道・茶道の両方を経験する。それぞれの技能を身につけるだけでなく、「たくましさ」「しとやかさ」などの心を育てることをねらいとしている。他に総合的な学習では、ホタテの研究、陸奥湾から学ぶ環境教育など、地域の教育力を活用して特色ある教育活動を展開している。人にも自然にも恵まれているからこそできる活動である。

この豊かな地域に生きる子どもたちの未来のために、これからも学校が家庭・地域と連携し、学校としての役割と責任をしっかりと果たしていきたいと考える。

